

2021 August

8月号

# 春燈



## 久保田万太郎の句

くもることわすれし空のひばりかな

『春燈抄』昭和二十二年

何日も続く雲ひとつない晴天。ひばりが光の粒となり、声を地上に落とす。この景に二通りの鑑賞が成り立つ。作者は晴天を喜んでいるのか、否か。

曇ることを忘れない空を作者は望んでいると解釈したい。晴天にあらわに姿を晒される雲雀は、真に憐れだ。雲雀は作者自身でもあろう。

雲に包まれ愁いを隠して春を送りたい万太郎である。

宮崎 洋

## 久保田万太郎の句

がてんゆく暑さとなりぬきうりもみ

『流寓抄以後』昭和三十八年

「三越落語會百回をむかふ」の前書がある。初案の上五は「うけとる」で、再案は「根を据ゑし」、そして最終的には「がてんゆく」に変わった。

暑い夏のさっぱりとしたお菜は、何と言っても「胡瓜もみ」だ。胡瓜は清熱、利水、解毒の効能があり、暑氣中りの予防にもなる。青紫蘇や茗荷、生姜をしのばせた物は取分け食が進む。先生もお好きだったのだらう。

木村みどり

安立公彦



梅雨に入る山なき国の茜空

南天の花や薄日を透かせ散る

さみどりの夏野の果の浅間山

病みて知る父の歩幅や土用波

幾そたび巡る句碑かや敦の忌

燈下集

○ 岩永はるみ

海に向く木椅子のふたり聖五月

薔薇垣や鎧戸ひらく牧師館

緑蔭の一所あかるし天使像

丘わたる夕べの鐘や桐の花

夕涼し国恋ふ墓碑の月日かな

○ 林 紀夫

夕立や古書肆の棚の稀観本

下町の九尺二間や燕の子

突然の笑ひの渦や黴の宿

ステイホーム居所のなき暑さかな

分れ多き鎌倉古道草いきれ

○ 栗原完爾

菖蒲湯やわが痩せ腕の力ごぶ

袖通すことなき父の麻服よ

外つ国へ嫁ぐ知らせや梅雨晴間

横浜はマーチが似合ふソーダ水

レリーフの馬がぬけだす青あらし

○ 江草 礼

改良の向日葵大中小の揺れ

柏餅仏頂面の子の本音

青ぬたや運命線の先長し

バーチャルの旅にひたるや夕端居

泥まみれになりて体験田植かな



○ 本多遊方

蚕豆や晋山の僧挨拶す  
現実と仮想空間走り梅雨  
待望の全仏オープン新茶汲む  
フルセットの試合展開薔薇崩る  
老鶯やワクチン予約とれぬまま

○ 武田巨子

夏近しタンクトップを笹染す  
雲中の宿の朝や岩雲雀  
人寄するかに花棟散りにけり  
梅雨晴の空の鼓動に耳澄ます  
懐中の紙香水や喜寿迎ふ

○ 諸岡孝子

軽暖や薄花ごろもにをちの山  
つくばひに吹かるる影や破れ傘  
こもり居の洗ひ茶巾や昼の雨  
武者人形わが家ひとりの理工系  
著我の花きりりと友の上寿なる

○ 小泉三枝

清貧な暮し十薬著りとす  
緑濃き田の一所余り苗  
白壁の五個荘の里青田風  
万緑に吸ひ込まれゆく新幹線  
麦秋や秩父地粉の強き腰

○ 平野加代子

夏夏と薰風連れて亡夫来る  
新茶届く友の草書の添へられて  
もやもやの眼底画像浮いて来い  
シャガールの月月蝕恋ふや五月闇  
透明なグランドピアノ梅雨明るる

○ 田嶋洋子

村の奥の母の生家や夏燕  
蚕豆や姑自慢嫁自慢  
姉妹涼しく助け合ひにけり  
窓開けて仏間に届く田植歌  
鈴蘭の夢ふくらます少女かな

○ 菅澤陽子

筍飯写真の父母へまづ供ふ  
万緑やあづまや囲む湧水池  
薔薇の名のサマーソングや夫に買ふ  
早ばやと届く子の荷やさくらんぼ  
読みさし本ふせて昼寝のアイマスク

○ 太田佳代子

森抜くる八十八夜の烏かな  
先達の健脚たしか桐の花  
聖五月白き空より雨落つる  
あぢさゐや今日はひとりの散歩道  
木漏れ日のまばゆき谷や岩清水

○ 長谷川歌子

保父囲む新樹の風の幼稚園  
どの樹にも光あまねし母の日来  
初陣の翅音なりし初蚊打つ  
妄信の日光消毒梅雨晴間  
漱石を捲りし指の辣蕪むく

○ 久保久子

初夏の深江にたたむ女波かな  
ででむしの世情を疎みひるみけり  
身にあまる思ひを跳べり青蛙  
鶉飼火の闇をからめて戻りけり  
山風の鎮もる夕べ河鹿笛

○ 金山雅江

残雪を縞に織りこむ駒ヶ岳(甲斐)  
辛口の批評ぴりりと夏大根  
ワクチンの予約は娘含羞草(ワクチン接種旬)  
白髪の翁の似合ふアロハシヤツ  
接種終へいざ万緑の街並へ

○ 廖運藩

雨を乞ふ国を挙げての神頼み  
雨乞ひや乾き連なるダムの上  
雨を乞ふ七重の膝を八重に折り  
ダム涸れの亀裂縦横雨祈る  
外労も拝跪の列に雨祈る(外国人労働者)

○ 久米 憲子

夏近し雲引き寄する柵田かな  
溪流のかぐはしきかな谷若葉  
リュックより顔出す小犬街薄暮  
新茶汲む終の一滴ねんごろに  
地下鉄の路線図の混む立夏かな

○ 小倉 陶女

草笛やまだ失はぬ好奇心  
青林橋両手に受けて恋生まる  
万緑の中や五重の塔の先  
帰るべき場所ありてこそ麦の秋  
短夜の開きしままの季寄せかな

○ 荒井 慈

雲の峰ベイブリッジの比翼かな(横浜五旬)  
南吹く港の風車右まはり  
青風ガンダム四肢飛ぶ構へ  
緑蔭の石碑に刻む聖句かな  
鞍馬天狗へくれなゐの薔薇一輪

○ 佐渡谷 秀一

籠り居の蜘蛛彷徨へるソファーかな  
居酒屋の提灯点かず櫻桃忌  
書き終へし原稿二枚苔の花  
月蝕に白く浮かぶや額の花  
梅雨寒や乱歩読み継ぐ花林糖

○ 沼田 桂子

蜥蜴現る異次元の彩放ちけり  
コロナ禍にも緑蔭といふオアシスも  
緑蔭の三婆密になつてをり  
思ひ切り話せる相手カーネーション  
むらさきの雨つれてくる七変化

○ 宮田 豊子

根付きけるうけらの花や師を忍ぶ  
開山祭故郷の山従へて  
日雷老女の胸を騒がする  
茂吉詠む赤茄子のうた身に沁むる  
着る事の適はぬ衣虫干しす

○ 井上 正子

復活祭心を生かす祈りせん  
鯖を煮る嫁への助言控へけり  
弟のやさしき言葉額の花  
桐の花介護役からされる身に  
涼しさの入歯入れての朝餉かな

○ 高埜 良子

説法の声染み渡るつつじ寺  
朴咲くやまなざし深き観世音  
新茶汲む目覚め良き日の願ひごと  
引売りのラッパ近づく麦の秋  
長屋門に入るや旧家の梅は実に

○ 三代川 玲子

にぎやかに来て手を浸す山清水  
靴脱ぎて五指を休ます針えんじゆ  
年諾ひ又さからうて更衣  
夕しほの満ちくる茅花流しかな  
五月闇力いっぱい鍋みがく

○ 吉川 隆

この夏草抜くにはなれぬ花を抱く  
鳥獣ら夏を謳歌の高山寺  
葉桜の川面を見せぬ目黒川  
貨車つなく響き遠くに夏未明  
輪を五つ大きく描けあめんぼう

○ 豊谷 青峰

海峡を一気に越えて飛魚の群れ  
海道に小ぶりの蛸の干されけり  
夜光虫櫓さばき映えて島眠る  
烏賊釣船夜を徹して灯しけり  
豊敷の島の教会明易し

○ 本田 保

何よりもスポーツが好き夏来る  
日差しにも雨にも走り梅雨の傘  
走り梅雨あせつてポロを出しにけり  
何しても目立ちたがりやの甚平かな  
羅のじつとみつむる眼なりけり

# 余言 安立公彦

この上五があつて、「木椅子のふたり」に生新さが感じられる。下五を「聖五月」で締めているのも、上五中七の感性を善く活かしている。

レリーフの馬がぬけだす青あらし 栗原 完爾

噴水にうらわかき風生まれけり 三上 程子  
海に向く木椅子のふたり聖五月 岩永はるみ

五月に予定されていた、第八回春燈神奈川支部大会は、新型コロナウイルスの蔓延が収まらず当初の予定を変更し、参加申込み者による吟行紙上句会となり、五月末に清記用紙が届いた。総句数一四四句。早速選句に入る。

参加者それぞれ、意を尽くした句だった。私が特選に戴いた句は、ここに掲げる二句だった。三上程子さんの句。一読「うらわかき風」に注目した。元より年数を言っているのではなく、新鮮な瑞々しい思いを表している中七である。同時にその中七が「噴水」をしつかりと支え、その噴水のある「港の見える丘公園」の風景を、善く映し取っているのも善い。句を見る人に景を呼ぶ句である。

岩永はるみさんの句。この句の善さは「木椅子」の発見である。普段なら見過ごしている「木」が、「ふたり」と善く釣り合っている。「海に向く」も善い。この海は横浜港。

「レリーフ」は浮彫。中学生の頃、東京芸大の先生が、定年を機に、私たちの学校に、工芸の教師として転職して来られた。早速工芸部が出来、入部して指導を受けた。その一つがレリーフだった。台木に粘土を盛り上げ、そこに対象を彫るのだ。或る年、県下の手工芸展に入選した私のレリーフが、仕舞う時、他校の生徒の手から落ち四散した。今、この句を見ていて、遙か昔の事が思い出されて来た。

私の彫ったのは、中宮寺の菩薩半跏像だったが、作者のレリーフは馬。その馬が馬小屋から抜け出し、青嵐の中を駆ける景だ。壮大な景色である。「北欧神話」を思い出す。

接種終へいざ万緑の街並へ 金山 雅江

接種は新型コロナウイルスのワクチンだろう。私も六月末に二度目のワクチンを接種する予定だ。しかし厄介な病気が流行るものだ。今度はインドにこの病気の新種が発生して猛威をふるっていると、ニュースは伝える。

作者は今、その接種を終える。初回か二回目か。二回終えると、コロナウイルスへの抵抗力が身に付くとのこと。この句は「いざ」と「街並」が面白い。この「いざ」と「街並」の対比を、「万緑」がしつかりと押さえている。

新じゃがを炊けば昔日仄ぼのと 篠原 幸子

「新じゃが」は「新馬鈴薯」、初夏の頃から出廻る。「ジャガタライも」の略。慶長年間、ジャカルタから渡来したのでこの名がある。じゃがたらお春の物語もある。

今、作者はこの新じゃがを炊いている。振り返ってみると、じゃが薯は戦後よく食べた。現在でも立派な料理の一つだろうが、何となく戦後を思い出す。作者もそういう思いだろう。「炊けば昔日仄ぼのと」が、善くその思いを伝えている。「昔日」が善い。

望郷の海向く墓碑や南吹く 大文字孝一

ここから再び「神奈川支部大会」の作品に戻る。作者の故郷は何処だろうか。この句は、その「望郷」が善く効いている。「海向く墓碑」は「横浜外国人墓地」であろう。この辺りは坂の多い街だ。その外国人墓地は一樣に海を向いている。はるばると大海原を越えて、この日本に着いた外国人の墓地である。眺めていると、その昔日の外国人の

望郷の思いが、作者にも伝わってくるのだった。「南吹く」も善く効いている。

夏蝶や鉄扉を閉ざす異人墓地 小山 繁子

前出の句と同じ「異人墓地」。道を登つて来ると、正面に異人墓地が見える。その墓地の入口には、鉄製の扉が固く締まっっていて、人影は見えない。そういう風景もまた、見る人には如何にも外国人墓地という思いが深い。

しばらくその鉄扉に見入る作者。その時、一羽の揚羽蝶がひらりとその鉄扉を越えて外国人墓地に舞入るのだった。「夏蝶」と「異人墓地」の取合せがみごとだ。その異人墓地には、今も幾多の異人の霊が眠っているのだ。

薔薇の香に染まり林火の句碑を訪ふ 持田 信子

大野林火の句碑を訪う道すがらの作である。先に鑑賞した横浜外国人墓地の東、フランス山にあるが、私はまだ行っていない。今回の神奈川大会の愉しみの一つと思っていた。今度の大会でこの地と思われる風景に、薔薇を点じた句は多かつたが、「林火の句碑」を詠んだ句は少ない。へ白き巨船きたれり春も遠からず林火。如何にも横浜らしい。掲出句、林火の句を受けて、「薔薇の香に染まり」は、林火への、作者の善き挨拶と言えよう。



# 当月集

安立 公彦選



○ 坂本依詠子

おとなしき風に首振る小判草  
ころびたる児の手に高し揚羽蝶  
感謝しますと媪のたより単物  
万緑の街やデパート休業中  
快気祝のメロン従兄よ健やかに

○ 山本泰人

○ 農野憲一郎  
微笑むと母に似る子や鯉轡  
けが敗けを叱られ黒蜜心太  
露の葉や祖母の咄のコロボックル  
孫娘の小さき浴衣やたたう紙  
ままごとの客や青梅ぐだくさん

孫と娘の蛇の目見送る春の雨  
春惜しむ青ふかぶかと有田焼  
狛犬の睨みきかする立夏かな  
二階から孫の歌降る青あらし  
梅の実の色づく葉かげ雨刺繡

○ 佐藤まさ子

○ 横山さくら

老鶯の大樹に一声谷の寺  
草笛や頬を窄むる餓鬼大将  
軒に吊るすてる坊主梅雨深し  
緋目高を数へ直すや午後の閑  
一輪の薔薇に華やぐ狭庭かな

行く先を伝へて軽し夏の蝶  
ブレイキをそつと抑へて梅雨の空  
旧友の文の癖字やソーダ水  
病室の小窓の外や合歓の花  
切れ味をそつと確かめトマト食ふ

# 春燈の句

安立 公彦選



蔵壁に明るき陽射し桐の花

兵庫 向井 芳子

店の灯の消えては殖ゆる五月閑

寝そびれて寝返り幾度走り梅雨

草原に犬を放つや青嵐

月涼し布巾を干してひと日終ふ

草蔭や程よき石に身をとどめ

福井 西本 花音

郭公や渡るに怖きかづら橋

夕餉の灯映れる紅き李かな

散ればなほ淋しき白や沙羅の花  
一人居に薔薇のみ紅の色深め

山桜桃ままごとの児の丁寧語  
桜蔭降るを厭はず六地藏

合歓の花閉ぢてより闇迫りけり

鳥の声緑雨こぼして飛び立てり

茨城 関 道子

夏蝶につられ我身を外に放つ

夏来る流れに浸す鍬と空

京都 西村 洋平

五月雨や線香烟る文殊堂

道草も寄り道もなく五月尽

葉桜や海の光を照り返し

梅雨寒や白寿の母の膝がしら

埼玉 斉藤みちよ

ずいずいと青竹を切る梅雨晴間

休園のいつまで続く時計草

京都 大槻 祐二

柏餅つつむ皺の手幼き手

新緑の櫛並木や天を衝く  
葉桜や暖簾古りたる染物屋  
蚕豆のさみどり愛づる母郷かな